



文化財愛護シンボルマーク

このシンボルマークは、ひろげた両手の手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱(ヒキヨウ=組みもの)のイメージを表し、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承してゆくという愛護精神を象徴したものです。

# うんせんし まいそうぶんかざい 雲仙市の埋蔵文化財について

みずほちょういこいせき はっくつちょうさ  
～瑞穂町伊古遺跡の発掘調査～

たらだけ  
多良岳

さが  
佐賀

ふくおか  
福岡

ありあけかい  
有明海

みずほちゅうがっこう  
瑞穂中学校

みずほそうごうしじょ  
瑞穂総合支所

さいこうしょうがっこう  
西郷小学校

いこいせきはんい  
伊古遺跡範囲

ながさきけんうんせんしきょういくいいんかい  
長崎県雲仙市教育委員会

ひょうしへいげい いこいせきえんげい  
表紙背景「伊古遺跡遠景」

## ★★★発刊にあたって★★★

○本冊子は雲仙市瑞穂町所在の伊古遺跡発掘調査に関する簡易な解説を目的としています。

○内容は県営圃場整備事業に伴い平成17年度～平成20年度に行なった発掘調査の成果です。

○本冊子に関するお問い合わせは雲仙市教育委員会までお願いします。

## いこいせきはっくつちょうさりゆう 伊古遺跡発掘調査の理由

★雲仙市には百花台遺跡などのたくさんの遺跡があります。「遺跡」とは、私達の祖先が暮らしていだ当時の、住居跡や生活用具（土器や石器）およびお墓などが発見される場所です。すなわち「私達の祖先が暮らした痕跡が残されている場所」のことです。この「遺跡」から発見された「土器・石器・住居跡・お墓」などは、私達の祖先の歴史そのもので、ひいては現在まで生きている私達の歴史でもあります。発掘調査を行うと私達がどのような歴史をたどって現代まで生き抜いてきたかがわかります。このような「遺跡」は大切な歴史遺産であり、私達みんなの財産といえるでしょう。雲仙市では「遺跡」が存在する場所で、しばしば開発工事が行われます。今回の伊古遺跡の調査は、水田の区画整理工事によって遺跡の一部が消滅してしまうため、その部分の調査を行って、私達の財産である「遺跡」の内容を記録する発掘調査を行いました。したがって、工事を行っても遺跡が消滅しない部分については、現地にそのまま遺跡が残っています。発掘調査を行った部分は遺跡全体の数%であり、まだたくさんある祖先の歴史が地中に保存されているのです。

## 発掘調査の基本

★右の写真は、遺跡の土層断面です。色の違う土が何枚も重なっているのがわかります。土の色は、堆積した時代によって異なり、発掘調査はこの色の違う土層ごとに調査を行います。この土層は、下のものほど古く、上の土層になるにつれ新しくなる特徴があります。したがって、それぞれの土層に含まれる土器・石器・住居跡の時代の古い・新しいの判断は、土層の重なりをみれば一目瞭然です。



★左の写真は古墳時代の「堀」の調査の様子です。深さ約1m、幅約2mの堀の中にたくさんの土器が発見されました。これらは使用しなくなったもののを捨てたものと考えられます。堀の底には50cmほど泥がたまり、その上部で土器が見つかっています。「堀」は泥がたまって浅くなれば役に立ちません。したがって「堀」が必要なくなり、その後土器も必要なくなり捨てられたと考えられます。土の重なりや土器の出土状況でその遺跡がどのような歴史をたどってきたかが判ります。

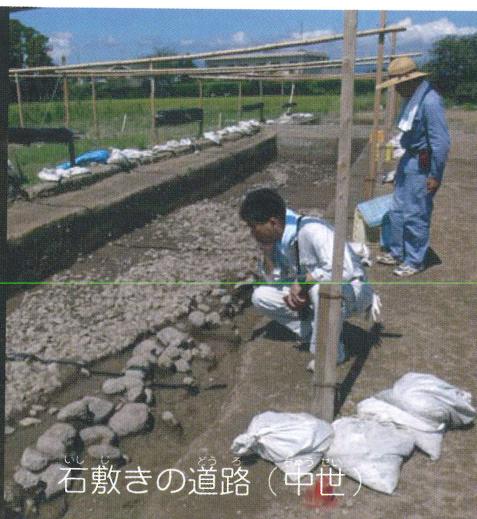
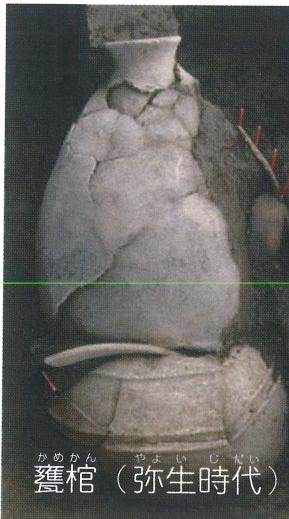
## はつくつちょうさ ようす 発掘調査の様子

★伊古遺跡の調査は、県営圃場整備事業（古江地区）に伴って行われました。圃場整備事業とは小さい田んぼを集約し、大きな水田として農作業の効率化や収穫の増加を目的とした事業です。農業を盛んに行っている雲仙市では地域の産業を発展させるために重要な事業です。伊古遺跡は、圃場整備事業範囲の大部分に広がっており、新しく道路や水路を建設する部分を中心に、4年間にわたって発掘調査を行いました。調査の結果、伊古遺跡からは、数万年前の旧石器時代から続く人々の生活のあとが発見されました。特に多くの発見があった時代は、約1万2千年前の縄文時代草創期と呼ばれる時代、約2千年前の弥生時代、約700年前の中世（鎌倉時代ごろ）の3時期です。



★発掘の結果、石敷きの道路や住居跡など、当時の人たちの手によって作られた構造物「遺構」。また、甕棺や矢じりなど、当時の人たちが作り使っていた道具「遺物」などが発見されました。発見された遺構や遺物は写真や図面によって記録し、遺物は番号をつけて丁寧に取り上げます。

伊古遺跡からは各時代のたくさんの遺構と数千点を超えるさまざまな遺物が発見されました。当時の人々の生活の様子がわかる貴重な発見となりました。



★発掘調査は、まず、表面の土を除去することから始めます。地表から数十センチの深さまでは、水田や畑の耕作などにより、昔の状況が失われてしまっているため、ショベルカーなどの機械を使用します。「昔の地面」や遺物包含層と呼ばれる「当時使われていた土器や石器がたくさん含まれている土層」まで掘り下がると、人の手によって丁寧に発掘を行います。



# じょうもん じ だい ようす 縄文時代の様子

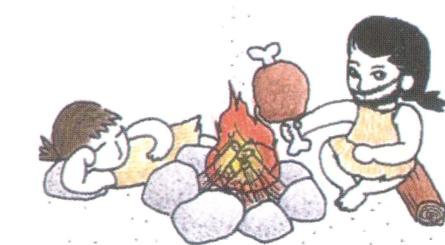
★伊古遺跡からは「縄文時代草創期」と呼ばれる、約1万2千年前の縄文時代の始まりごろの遺物が1,500点以上見つかっています。県内でも有数の出土数です。主なものは「細石刃」と呼ばれる小さな黒曜石製の石器。長さ数センチ、幅数ミリのかみそりの刃のような石器です。600点以上が発見されています。そのほかに表面の磨かれた「磨製石斧」や「土器片」、「矢じり」なども発見されています。「細石刃」の材料の黒曜石は火山活動でできる「天然のガラス」です。島原半島ではほとんど見られない石で、遠く佐世保や佐賀県から運んできたものと考えられます。ただし、島原半島でも小指の先ほどの小さな黒曜石が採取できる場所もあり、その小さい石も使用している様子が見られます。「細石刃」は、「細石核」と呼ばれる石器から丁寧に割り取られたもので、細石核の表面には細石刃を割り取った跡がスジ状に残ります。伊古遺跡ではこの細石核が50個以上も発見されており、細石刃を集中的に作る「工房」のようなものが存在したと考えられます。「細石刃」1個では石器として使用できず、復元写真のようにやり先などの周囲に装着し、狩猟具として使用していた石器です。シベリアのココレヴォ遺跡では、鹿の角を加工して作られたものに、細石刃がはめ込まれたままの姿で発見されています。このような槍を「植刃器」と呼びます。右写真は「竹のやり」で復元しています。



★「植刃器」は、旧石器時代の終わりごろに登場する道具です。それまでは1個の大きな石で作ったやり先を使っていましたが、破損すると作り直さなければならず、材料である黒曜石なども多く必要です。「植刃器」では破損した部分の細石刃のみ取り替えればすみますので、材料も少なくてすみます。さらに、重い予備のやり先をいくつも携えて野山を駆け回るのは大変ですが、「細石刃」であれば非常に軽くてすみます。「細石刃」・「植刃器」の登場は、旧石器人たちの生活を大きく変えたと考えられます。

★続く縄文時代草創期は、これまでの旧石器時代から縄文時代へ大きく移り変わる時代の変換期です。旧石器時代と縄文時代の大きな違いは、「土器と弓矢」の発明でした。旧石器人たちちは石で作った槍を武器に動物を追いかける「狩猟生活」を行っていました。「突き槍」もしくは「投げ槍」として使用するため、獲物までかなり近づかなければなりません。したがって大きな獲物や比較的動きの遅い獲物など、獲る動物が限定されてしまいます。しかし、弓矢を使うと遠くの獲物や動きの早い獲物も捕まえることができるようになります。また、それまでは獲った獲物を食べる際には、「そのまま」か「火で焼く」程度しか調理方法がありませんが、「なべ」として使用する「土器」の発明により、さまざまな調理を行うことができ、それまで食べられなかったものも食料となっていました。また、旧石器時代から縄文時代への移り変わりには、地球の気候変動も大きく関係しています。寒冷だった旧石器時代から縄文時代は次第に温暖化し、植物群も変化します。それに合わせて動物たちも大型のものから中型・小型のものへ変化していきました。旧石器人たちはこの気候変動による環境の変化に対応するように、縄文人に進化していったのです。

★伊古遺跡では、旧石器時代から続く「植刃器」による狩猟生活を行いながらも、縄文的な弓矢や土器も使用する生活を送っていたと考えられます。時代の大きな移りわりの中で暮らす伊古遺跡の古代人の生活がしのばれます。



旧石器人は原始人のイメージ！？



やりの名手！



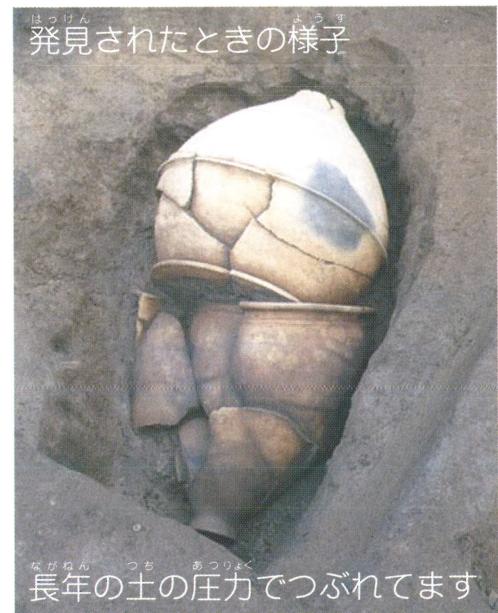
縄文人に進化！？



# やよいじだい ようす 弥生時代の様子

★伊古遺跡からは約2千年前の弥生時代の集落も見つかっています。竪穴住居の跡や集落の周囲にめぐる環濠などが発見されており、佐賀県吉野ヶ里遺跡や壱岐市原の辻遺跡などと共通する「環濠集落」の可能性があります。「環濠集落」とは集落の周りを「環濠」と呼ばれる「堀」で囲んだもので、原の辻遺跡では2重3重に囲う様子が発見されています。環濠集落は地域の中心となる大規模な集落で、弥生時代の伊古遺跡周辺には多くの人々が暮らしていたことが伺えます。

★遺跡からは多くの土器や石器などの生活用品が見つかっています。写真の「甕棺」は、亡くなった人を甕の中に入れ、お墓に納めるための「棺」です。「口」の部分を合わせた格好でお墓に納めます。このような甕棺を「合せ口甕棺」と呼び、九州北部地域では一般的な埋葬方法です。大きさは高さ60センチほどですので、大人用ではなく子供用の「小兒甕棺」と呼ばれるものです。周辺からは重要な行事などの際に使う、赤く彩られた土器も見つかっており、死者を丁重に送り出すお葬式などが行われていたと考えられます。大人用の甕棺は1mを越えるもので、伊古遺跡でもその破片が見つかっており、まだ地中に残されているものがあるかもしれません。



★「石包丁」は包丁と名前がついていますが、現代の包丁とちがい、稻の収穫に使ったものです。薄い石の表面をきれいにみがいて、下側を一段と薄く研ぎ「刃」がつけられています。当時の稻の収穫は、稻の実る先端部分「稻穂」を摘み取ります。石包丁の「刃」で稻穂を切り、収穫していました。石包丁が遺跡から見つかることは稻作を行っていた証拠と考えられます。



て多くの人々が集う「クニ」のひとつだったかも知れません。



上写真の甕棺は瑞穂町公民館で展示中

★伊古遺跡に暮らした弥生人たちは、地域の中心的な大規模な集落のなかで、畑や水田を整備し稻作を行い、死者を丁重に弔うなど、組織的・社会的な生活を送っていたことが考えられます。また、発見された土器の中には、有明海を越えた熊本・佐賀地域のものも見つかっており、ほかの地域の人々との交易を行っていたことも伺えます。弥生時代は地域のまとまりが強くなり、その後半には邪馬台国などの「クニ」もできてきます。伊古遺跡も地域の中心地とし



現場説明会の様子

## ちゅうせい ようす 中世の様子

★中世、鎌倉時代ごろの伊古遺跡からは、たくさんの中国製の青磁碗・白磁碗や、土製の碗や皿、滑石と呼ばれる西彼杵半島で採取される石で作られた「石鍋」、石を敷き詰めた道路の跡や建物の柱を地面に立てた跡、製鉄路の跡やお墓など、さまざまな遺物・遺構が見つかっています。現在はのどかな田園風景ですが、かなり大規模な中世のまちなみが広がっていたことは間違いないでしょう。

★発見された中国製の青磁碗は当時高級品として扱われ、一般的な日用品ではありませんでした。伊古遺跡では周辺の遺跡に比べて非常に多くの青磁碗が発見されています。発掘調査で見つかる遺物のほとんどは割れたり、または小さな破片になっていますが、唯一1点だけ完全な形で見つかった青磁碗があります。遺跡の東端の小高いかけの中腹で、遺跡を見渡せるような場所から見つかりました。青磁碗はお墓へのお供え物と考えられ、遺体の埋葬のときに一緒に埋められたものと考えられます。当時の領主や有力者のお墓でしょうか。亡くなってからも、まちなみを見渡すかけの上から人々の暮らしを見守っていたのかもしれません。

★青磁碗は作られた地域や焼かれた窯などでさまざまな特徴があります。伊古遺跡で見つかったものは、いずれも中国南部、現在の浙江省にある「龍泉窯」と福建省の「同安窯」と呼ばれる焼き物の産地で作られたものです。文様や色合いなど少しずつ特徴が異なります。龍泉窯の特徴は器の外側に蓮の花びらの文様。同安窯は器の外側に櫛描き文と呼ばれる文様。別名「猫搔き文」。これら高級輸入品をどうやって伊古遺跡の人々が手にいれたのかわかりませんが、この地に有力豪族がいた証と考えられます。



土製の瓦器・土師器と呼ばれる日用品



唯一の完全な形の碗  
県内で3個目！



ねこ 猫の爪で引っか  
いた様な文様が  
特徴「猫搔き文」

★伊古遺跡は、縄文時代の始まりからずっといつの時代も地域の中心的役割を果たしてきたと考えられます。今回紹介した内容はほんの一部で、今後も皆さんに発掘調査での成果を紹介していきます。

★雲仙市内にはまだたくさんのお墓があり、地域のすばらしい歴史が残っていると考えられます。もしかすると、皆さんが暮らすすぐ足元に、歴史の新発見が眠っているかもしれません。

# 雲仙市管内図

平成十七年十月

